アイオイウミサボテン

サンゴやイソギンチャクと同じ刺胞動物の一種です。茎のような部分を海底につき刺してからだをささえ、触手を広げて流れてくるプランクトンなどをとらえます。

●ウミエラ目コンボウウミサボテン科●20cm(全長)●日本近海(房総半島から南)、朝鮮半島沖●水深10〜300m

アカチョウチンクラゲ

水中をただよいながらくらし、小さな甲かく類などを食べます。発光生物を食べると、胃ぶくろが光を放って敵に見つかりやすくなるので、光を通さないまっ赤な膜で胃ぶくろをおおっています。

●ハナクラゲ目エボシクラゲ科●5cm(かさの直径)●世界中●水深200〜2000m

アカボウクジラ

外洋に群れでくらすクジラです。好物のイカを食べるため、深海にもぐります。深さでは水深2992mまで、時間では3時間42分ももぐっていた記録をもち、これはほ乳類のなかで最深最長の記録です。

●クジラ偶蹄目アカボウクジラ科●7m(全長)●世界中の温帯〜熱帯●表層〜水深2992m

アブラボウズ

幼魚は海にうかぶ海藻やごみなどについてくらし、成長すると深海にすみかをうつします。

●スズキ目ギンダラ科●1.8m(全長)●日本近海(北海道〜南日本の太平洋側)、太平洋北西部〜北東部●表層〜水深823m

アメリカオオアカイカ

体重50kgにもなるアカイカ科の最大種で、ダイオウイカにまちがえられることもあります。昼間は深海にくらし、夜に水面近くまで上がってきて小さい魚類やイカなどを食べます。

●ツツイカ目アカイカ科●1m(胴の長さ)●太平洋東部●表層〜水深700m

伊豆諸島と小笠原諸島周辺

日本列島の南東の沖合には、マリアナ海溝ともつながる伊豆・小笠原海溝があります。この伊豆・小笠原海溝にそって連なる火山島の集まりが、伊豆諸島や小笠原諸島です。クジラの死がいに集まる生き物による生態系(鯨骨生物群集)も見つかっています。

イバラヒゲ

海底近くにくらし、下向きの口をのばして、さまざまな生き物を食べます。とてもすぐれた鼻をもち、わずかなにおいだけでえものをさがし出します。

●タラ目ソコダラ科●80cm(全長)●日本近海(北海道〜四国の太平洋側)、太平洋北西部〜北東部●水深300〜2500m(おもに900〜1300m)

エゾイバラガニ

名前に「カニ」とつきますが、カニではなくヤドカリに近いなかまです。深海の海底にくらし、貝類や甲かく類などを食べます。

●十脚目タラバガニ科●12cm(甲らのはば)●日本近海、太平洋北西部〜北東部●水深470〜1600m

エッチュウバイ

大型のものは、昼間はどろにもぐって休み、夜に海底をはいまわって生き物の死がいなどを食べます。日本海の固有種で、2万年ほど前に日本海のほとんどの深海生物が絶滅したときにも生きのびた種の1つです。

●新生腹足目エゾバイ科●12cm(からの高さ)●日本近海(日本海)●水深200〜500m

エボシナマコ

おしりのほうにエボシ(平安時代の貴族などがかぶるぼうし)のような突起があり、この突起で海水の流れを感じ取っていると考えられています。海底にくらし、どろの中の小さな栄養分のつぶを、どろごと食べています。

●板足目エボシナマコ科●15cm(体長)●世界中●水深3000〜5000m

オウムガイ

大きな貝がらをもつのでまき貝のなかまのように見えますが、イカやタコに近いなかまです。からだのつくりが大昔からほぼ変わっていないので、「生きている化石」とよばれています。

●オウムガイ目オウムガイ科●20cm(からの長さ)●太平洋西部〜インド洋●表層〜水深500m

オオダイダイクダクラゲ

1匹の長い生き物のように見えますが、小さな「個虫」が数十匹集まってつながった生き物です。潜水調査船で近づいたくらいではばらばらになりません。

●クダクラゲ目オオダイダイクダクラゲ科●8〜10m(群体の長さ)●太平洋、大西洋●水深400〜2000m

オトヒメノハナガサ

イソギンチャクのように1匹の「ポリプ」で生きています。茎のような部分が長くのび、高さが2mほどになることもあります。三陸沖の深海では潮の流れが速く、ポリプの茎がかなり大きく曲がります。

●ハナクラゲ目オオウミヒドラ科●最大2.2m(高さ)●日本近海、太平洋、インド洋●水深311〜6961m

オハラエビ科の一種

カリブ海でのみ見つかっている、熱水噴出孔のまわりにくらすエビです。熱水に集まる微生物を食べるために、何千匹もの大群で群がります。ふつうのエビとは眼の位置がことなり、せなかに眼があります。

●十脚目オハラエビ科●3〜4cm(体長)●カリブ海ケイマン諸島沖●水深2300〜4960m

オビクラゲ

名前にクラゲとついていますが、刺胞動物のクラゲではなく、クシクラゲのなかまです。平たく長い帯のようなからだをもち、からだ全体をくねらせて泳ぎます。

●オビクラゲ目オビクラゲ科●80cm(体長)●太平洋、大西洋(地中海など)●表層〜水深300m

海溝

2つのプレートがぶつかると、かたほうのプレートがもうかたほうのプレートの下にもぐりこみ、さかい目に深い谷が生まれます。この谷が海溝です。海溝では海面近くの600〜1000倍もの高い水圧がかかりますが、ここにもきびしい環境に適応したためずらしい生き物がくらしています。

海底下生命圏

海底下の地層は、深い所へいけばいくほど、高い圧力を受け、温度も高くなります。また、栄養分や酸素、水分がとぼしくなっていきます。しかし、そんなきびしい環境にも、たくさんの微生物がくらしていることがわかってきました。これが「海底下生命圏」です。

海底広域研究船「かいめい」

陸地からはなれた深海まで、研究者や有人潜水調査船、探査機などさまざまな機械を運ぶ船です。有人潜水調査船や探査機などの修理・点検をする「支援母船」としての役割もあります。また、深海からとってきたサンプルを分せきできる研究室もあります。

海嶺

2つのプレートが遠ざかるさかい目では、すきまをうめるために地下から上ってきたマントルが、マグマとなって海底からわき出します。ふき出したマグマが冷えてかたまると、プレートのさかい目にそって海底火山の山脈ができます。この山脈のことを「中央海嶺」といいます。

ガラパゴスハオリムシ

熱水噴出孔のまわりにくらす、ゴカイのなかまです。白い管の中にすみ、まっ赤なえらを管から出します。

●ケヤリムシ目シボグリヌム科●3m(全長)●太平洋東部(ガラパゴス諸島沖など)●水深2000〜2670m

カリフォルニアシラタマイカ

ゴマフイカ科のイカは、左右の眼の形や大きさがことなり、左眼だけが大きく発達しています。からだを横にして泳ぎ、視力のすぐれた左眼を上に向け、上を泳ぐ甲かく類などのえものをさがします。からだじゅうが発光器におおわれています。

●ツツイカ目ゴマフイカ科●13cm(胴の長さ)●太平洋東部●水深200〜800m

キワ属の一種

熱水噴出孔のまわりにすむヤドカリのなかまです。キワ科はふさふさの毛が特徴で、この種はおなかがとくにふさふさです。毛のあいだにすむ微生物を熱水にふくまれる化学物質で育て、食べると考えられています。

●十脚目キワ科●5cm(甲らの長さ)●東スコシア海嶺(南極海と大西洋のさかい目)●水深2394〜2608m

キンチャクヤドカリ

ヤドカリのなかまですが、貝がらをせおっていません。ふくろのような形のスナギンチャク類(イソギンチャクに近いなかま)を、まるでパンツをはくかのように身にまといます。

●十脚目ヤドカリ科●2.5cm(甲らの長さ)●太平洋西部、日本近海(南西諸島沖)●水深136〜1125m

キンメダイ

深い海の岩場にすみ、魚や甲かく類などを食べます。少ない光を効率よく集められる大きな眼をもち、光を当てると眼が金色に光って見えることが名前の由来です。

●キンメダイ目キンメダイ科●40cm(全長)●日本近海、太平洋、インド洋、大西洋●水深25〜1300m(おもに400〜600m)

クラゲナマコ

ナマコのなかまでただ1種、まったく海底におりずに、一生泳ぎ続ける種です。長くのびたいぼあしの先が半透明につながり、帆のようになっています。この帆を開いたりとじたりして泳ぎます。

●板足目クラゲナマコ科●16cm(全長)●太平洋東部●水深300〜7000m

クロカムリクラゲ

泳ぐときは、かさの先と触手を進みたい方向に向けます。敵におそわれると、青白く光る発光液を出して逃げます。ふだんは深海にくらしていますが、北大西洋などでは、海面近くの氷山の下にもあらわれます。

●カムリクラゲ目クロカムリクラゲ科●最大20cm(かさの直径)●世界中●水深300〜6464m

ゲンゲ科の一種

カリブ海ケイマン諸島沖の熱水噴出孔のまわりで見つかった魚です。なにを食べるのかわかっていませんが、胃の中からリミカリス ハイビサエのからが見つかっています。

●スズキ目ゲンゲ科●最大19.9cm(オスの全長)●カリブ海ケイマン諸島沖●水深2309〜2313m

コア

「ちきゅう」が採取した地質コアはJAMSTECの高知コアセンターの冷蔵庫に保管され、とくに微生物をふくむコアは−80℃で冷凍保存されます。

コウテイペンギン

南極大陸や南極海の氷の上でくらす、世界最大のペンギンです。最長で30分ほど息を止めていることができ、海にもぐってイカや魚をつかまえます。深海までもぐることもあり、水深564mまでもぐったという記録があります。

●ペンギン目ペンギン科●最大1.3m(全長)●南極海、南極大陸●水深0〜564m

コウモリダコ

イカともタコともちがう、原始的な特徴を残す頭足類です。コウモリダコ目で現在も生息が確認されているのは、この1種だけです。8本のうでのほかに2本のひものような触手があり、これでプランクトンやマリンスノーを集めて食べます。

●コウモリダコ目コウモリダコ科●10cm(胴の長さ)●世界中●水深500〜1500m

コトクラゲ

クラゲではなく、クシクラゲというグループの生き物です。ほかのクシクラゲとはことなり、海底の岩などにくっついてくらします。べたべたした触手をのばし、プランクトンなどをからめとって食べます。

●クシヒラムシ目コトクラゲ科●15cm(高さ)●日本近海●水深70〜468m

コンゴウアナゴ

クジラの死がいや骨のまわりに集まる生き物の代表的な種です。ときには、死んだクジラや大きな魚のおなかの中に入りこんで内臓を食べることもあります。

●ウナギ目ホラアナゴ科●最大60cm(全長)●日本近海(北海道〜九州の太平洋側、南西諸島沖)、太平洋、大西洋、インド洋●水深366〜2670m

相模湾と駿河湾

相模湾と駿河湾は、大陸だながとてもせまく、深海が身近な海です。陸地から水深1000mの深海までの距離がわずか2kmの所もあります。そのため、陸地のすぐ近くでもタカアシガニやメンダコなど、さまざまな深海生物を見ることができます。

サクラエビ

夜に海面近くでプランクトンを食べ、昼間は深海にもぐります。昼間は河口の近くでおこなうので、沿岸部と深海の距離が近い駿河湾や相模湾のような場所を好みます。食用にされ、駿河湾の特産品としても有名です。

●十脚目サクラエビ科●4cm(体長)●日本近海(東京湾から南)、太平洋北西部(台湾)●水深30〜350m

サツマハオリムシ属の一種

メキシコ湾の湧水域にすむゴカイのなかまで、成長すると全長1.5mになります。同じなかまのガラパゴスハオリムシは熱水噴出孔のまわりを好みますが、この種は湧水域を好みます。細い管の中でくらし、体内に共生する微生物から栄養分をもらいます。

●ケヤリムシ目シボグリヌム科

サメガレイ

海底ですなにかくれてくらし、おもにクモヒトデを食べます。からだの表面に細かい突起がたくさんならんでいて、さわるとサメはだのようにザラザラすることが名前の由来です。

●カレイ目カレイ科●45cm(全長)●日本近海(日本海、北日本の太平洋側)、太平洋北部●水深15〜1900m(おもに400〜600m)

サメハダホオズキイカ

からだは透明で、胴体の表面がサメはだのようにざらざらしています。危険を感じると、からだをふくらませてボールのようになります。

●ツツイカ目サメハダホオズキイカ科●13cm(胴の長さ)●世界中の熱帯〜亜熱帯●水深数百m

三陸沖と日本海溝

東北地方の太平洋側、三陸海岸の沖合では、水深1000〜3000mまではなだらかな海底が続き、そこから水深8000〜9000mの日本海溝までいっきに海底が落ちこみます。でこぼこが多い海底は、深海生物がくらしやすい環境です。さらに、北太平洋から流れてくる親潮(千島海流)がたっぷりと栄養分を運び、ゆたかな深海の生態系をささえます。

シーラカンス

昼間は水深50〜200mほどの海底にある洞くつにかくれていて、夜に水深600mほどの深さまでもぐって活動します。

●シーラカンス目ラティメリア科●1.8m(全長)●アフリカ南東部●水深50〜700m

シチヨウシンカイヒバリガイ

熱水噴出孔のまわりにくらし、体内に共生する微生物からほとんど栄養分をもらっていると考えられています。遠くはなれた日本近海の小笠原諸島沖にもすんでいて、もともと別の種だと思われていましたが、現在では同じ種だとわかっています。

●イガイ目イガイ科●12cm(からの長さ)●インド洋、日本近海(伊豆・小笠原諸島沖)●水深1200〜2730m

シマガツオ

外洋の深い所にくらす、泳ぎが得意な魚です。夜になると、えものが多い表層まで上がってきます。

●スズキ目シマガツオ科●60cm(全長)●太平洋(南半球と赤道付近をのぞく)、日本近海●表層〜水深620m

シャチブリ

からだはゼリーのようにぶよぶよしていて、海底近くをゆっくりと泳ぎます。海底のエビやカニなどを、下向きに飛び出す口で吸いこんで食べます。

●シャチブリ目シャチブリ科●1m(全長)●日本近海(南日本)、太平洋西部、インド洋東部●水深100〜600m

シラエビ

おもに富山湾や、相模湾、駿河湾などにくらしています。昼間は深海にもぐり、夜にえものを追って海面近くに上がります。富山湾は、日本でただ1か所、シラエビ漁業がおこなわれていて、特産品の「シロエビ」として有名です。

●十脚目オキエビ科●7cm(体長)●日本近海(富山湾など)、太平洋西部●昼間は水深600mまでの深海、夜は表層

シロウリガイ

海底からわき水がしみ出す湧水域にくらす二枚貝です。えらの中に微生物を共生させ、微生物がわき水にふくまれる硫化水素を利用してつくった栄養分をもらって生きています。

●マルスダレガイ目オトヒメハマグリ科●16cm(からの長さ)●日本近海(相模湾)●水深750〜1500m

シンカイエソ

からだは白く、大きな口にはするどい歯がならんでいます。海底のすな地でじっと待ちぶせをして、近づいてきた魚などに食いつきます。

●ヒメ目シンカイエソ科●65cm(全長)●太平洋、大西洋、インド洋、日本近海(小笠原諸島沖など)●水深400〜4903m(おもに2500〜4500m)

シンカイヒバリガイ

湧水域や熱水噴出孔にくらす二枚貝で、この種は日本近海の相模湾や南西諸島沖で見つかっています。海底の岩などにくっついてくらし、環境が悪くなると、岩からはなれて移動します。

●イガイ目イガイ科

ジンゴロウヤドカリ

貝がらにヒメキンカライソギンチャクなどのイソギンチャクをつけてせおい、毒ばりで身を守ります。イソギンチャクが貝がらのようなものをつくり、それをもとの貝がらに足して大きくしていくので、ヤドカリは引っこしが少なくてすみます。

センジュナマコ

丸みのあるからだと、せなかから長くのびた突起が特徴です。口のまわりの触手で海底のどろをかき集め、どろの中の小さな栄養分のつぶをこし取って食べます。

●板足目クマナマコ科●最大9cm(体長)●日本近海(北海道〜北日本)、太平洋、南極海●水深545〜6720m

ソコクラゲ

ソコクラゲは、ほとんど泳ぐことなく、海底の岩場などにくっついてくらすクラゲです。下向きの触手で岩にしっかりとはりつき、上向きの触手でえものをとらえます。

●硬クラゲ目ソコクラゲ科●2cm(かさの直径)●日本近海(日本海)、太平洋、南極海●水深0〜4000m

ソコボウズ

海底の甲かく類や貝類、落ちてきた生き物の死がいなどを食べる、大型の肉食魚です。細長い腹びれで海底をさぐって食べ物をさがすと考えられています。

●アシロ目アシロ科●1m(全長)●太平洋、インド洋、大西洋、日本近海●水深800〜4500m(おもに2000〜3000m)

ダイオウイカ

世界最大の無脊椎動物(背骨のない動物)で、最大で18mの個体もいると考えられています。大きな眼でわずかな光も感じ取り、イカや魚などのえものを見つけます。

●ツツイカ目ダイオウイカ科●2m(胴の長さ)●世界中●水深0〜1000m

ダイオウホオズキイカ

世界最大級のイカで、体重は最大で500kgに達し、重さだけならダイオウイカ以上ともいわれています。きゅうばんがかぎづめに変化していて、えものをとらえるときに役に立つと考えられています。

●ツツイカ目サメハダホオズキイカ科●2.5m(胴の長さ)●南極海●水深2000〜4000m

ダイダラボッチ

超深海で見つかった世界最大のヨコエビのなかまです。ヨコエビのなかまはたいてい数cmほどの大きさですが、ダイダラボッチは成長すると30cmをこえる個体もいます。魚の死がいを食べにくるすがたが観察されています。

●端脚目アリセリダエ科●最大34cm(体長)●太平洋、大西洋●水深3000〜8233m

タカアシガニ

世界最大の甲かく類で、大きいものではあしを広げた長さが3mをこえます。がんじょうなはさみで魚や貝などをとらえて食べます。子どものころは、からだにごみなどをくっつけて海底にまぎれ、敵に見つからないようにします。

●十脚目マクロケイリダエ科●30cm(甲らのはば)●日本近海(太平洋側)、太平洋北西部(台湾)●水深50〜800m

ダルマザメ

外洋にすむ小型のサメで、大型魚類やクジラ類、アザラシなどの肉をかじり取って食べます。かみあとがクッキーの型のように見えるので、「クッキーカッターシャーク」ともよばれています。

●ツノザメ目ヨロイザメ科●最大56cm(全長)●世界中の温帯〜熱帯●表層〜水深1000m

チチュウカイヒカリダンゴイカ

水深300mほどの深さで、よく群れをつくっています。敵におそわれると、発光液をはいて逃げます。

●コウイカ目ダンゴイカ科●2.5cm(胴の長さ)●大西洋北部(地中海など)●水深0〜2000m(おもに200〜800m)

チヒロカスベ

エイのなかまでは、もっとも深い所にすむ種です。海底のどろの上にくらし、ゴカイや甲かく類、魚などを食べます。おなか側にもうろこがあります。

●ガンギエイ目ヒトツセビレカスベ科●最大1.6m(全長)●日本近海(北海道〜北日本の太平洋側)、太平洋北部〜北東部●水深362〜2906m(おもに1000mより深い)

チヒロクサウオ

日本海溝だけから見つかっている超深海の魚で、同じなかまのマリアナスネイルフィッシュととてもよく似ています。皮ふはうすく、からだは水分を多くふくんでゼリーのようにぶよぶよしています。

●スズキ目クサウオ科●12cm(全長)●日本近海(日本海溝)●水深6380〜7703m

チュラウミカワリギンチャク

沖縄県の沖縄美ら海水族館で15年間飼育されたあと、2019年に新種だとわかったイソギンチャクです。深海の岩などに群生するすがたが観察されています。

●イソギンチャク目ヤツバカワリギンチャク科●20cm(全長)●日本近海(南西諸島沖)●水深320m

チョウジガイ科の一種

北大西洋でよく見られるイシサンゴのなかまです。あたたかい海のイシサンゴは、体内にすむ藻類から栄養分をもらいますが、冷たい海にすむチョウジガイ科の体内には、藻類がいません。そのため、流されてくる小さな栄養分のつぶを触手でからめとって食べます。

超深海(マリアナ海溝)

深海では、水深が深くなるほど表層からしずんでくる食べ物が減り、生き物も少なくなります。しかし、海溝の底では、海溝の近くの深海平原より多くの微生物がくらしていることがわかってきました。これは、海溝の斜面ではよくどしゃくずれが起き、地中の栄養分がまき上げられることで、微生物の活動が活発になるからだと考えられています。

チョウチンアンコウ

頭から生えたつりざおのような器官の先を光らせて、オキアミやイカなどのえものをおびきよせます。繁殖期のオスは出会ったメスのからだにかみついて、はなれないようにしますが、繁殖期が終わるとはなれます。

●アンコウ目チョウチンアンコウ科●40cm(メスの全長)●太平洋、大西洋、日本近海●水深600〜1210m

チョウチンハダカ属の一種

退化した眼球のかわりに、網膜(光を感じる膜)が板のような形に発達し、頭の上についています。ものを見る力はありませんが、生き物が発するわずかな光を感じ取り、えものをさがします。

●ヒメ目チョウチンハダカ科●最大15cm(全長)●大西洋●水深1789〜3477m

テナガタコイカ

冷たい海の海底近くにくらし、ほかのイカやタコを食べます。イカの特徴である2本の長いうでをもたないため、うではタコと同じく8本しかありません。

●ツツイカ目テカギイカ科●35cm(胴の長さ)●日本近海(日本海、北海道の太平洋側)、太平洋北西部(オホーツク海)●水深500〜1029m

テングギンザメ

大きさは2mほどです。平たく長い口先が特徴で、てんぐの鼻に似ていることから名前がつきました。

トカゲギス

ウナギのように細長いからだつきで、長いしりびれを波打たせながら泳ぎます。ソコギス目は、大陸斜面の海底でよく見られる魚のグループのひとつです。

●ソコギス目トカゲギス科●40cm(全長)●日本近海(太平洋側)、太平洋、インド洋、大西洋●水深730〜2560m

ドフラインイソギンチャク

深海の岩礁にくらすイソギンチャクで、太い触手が特徴です。深海では、まわりにエビ類が集まっているようすが観察されています。

●イソギンチャク目カワリセトモノイソギンチャク科●10cm(直径)●日本近海(南日本の太平洋側)、太平洋西部、インド洋●水深160〜800m

ナギナタシロウリガイ

海底から硫化水素をふくんだわき水がしみ出す、「湧水域」にすむ二枚貝です。えらの中に共生する微生物が硫化水素を利用して栄養分をつくり、それをもらって生きています。からだを半分ほど海底につき刺すようにしてくらしています。

●マルスダレガイ目オトヒメハマグリ科●17cm(からの長さ)●日本近海(日本海溝)●水深4700〜6400m

ナマハゲフクロウニ

すなやどろにおおわれた海底にくらし、どろの中の小さな栄養分のつぶなどを食べます。からがやわらかいのでからだの中を水で満たし、からだをささえています。

●フクロウニ目フクロウニ科●10〜12cm(からの直径)●太平洋、インド洋、日本近海●水深170〜2300m

ナンキョクオキアミ

南極海に大きな群れでくらす、エビに似た甲かく類です。地球上でもっともたくさんいる動物のひとつといわれ、その数は数百兆にもなります。アザラシやイカ、魚などの食べ物となり、南極海の生態系をささえています。

●オキアミ目オキアミ科●6cm(体長)●南極海●水深0〜2000m

ナンヨウミツマタヤリウオ

するどくとがった歯をもち、あごの下から発光器がついたひげのような突起がのびています。この光る突起を動かして、えものをおびきよせます。仔魚は、成魚とは大きく見た目がことなります。

●ワニトカゲギス目ミツマタヤリウオ科●40cm(メスの全長)、5cm(オスの全長)●世界中の熱帯〜亜熱帯●表層〜水深2000m(おもに30〜800m)

日本海と富山湾

日本海は、陸地にかこまれた、とじられた海です。太平洋とつながるいくつかの海峡は水深が浅く、深海生物の行き来をはばみます。そのため、ソコダラ科の魚など、太平洋側ではよく見られる深海生物も、日本海にはあまり進出していません。いっぽうで、昔から日本海にすんでいたエッチュウバイなど、固有種の深海生物もいます。

熱水鉱床

熱水噴出孔のまわりでは、熱水にふくまれる金属が冷やされて小さなつぶになり、海底にたまります。このなかには、金や銀をはじめとする貴重な金属も多くふくまれています。

熱水噴出孔

中央海嶺や海底火山のまわりでは、海底の下深くまでしみこんだ海水がマグマの熱であたためられ、300℃をこえる高温の熱水になります。この熱水が海底からふき出す場所が、「熱水噴出孔」です。熱水には地中のさまざまな物質がとけこみ、そのなかには、生物にとって有毒な硫化水素もふくまれます。

バルーンダンボオクトパス

ほかのタコのなかまとちがって、うでのきゅうばんが発光器に変化しています。うでのあいだの膜を広げて泳ぎ、発光器の光を食べ物とまちがえて近づいてきたプランクトンなどをとらえて食べます。

●タコ目ジュウモンジダコ科●50cm(全長)●大西洋●水深400〜4000m

ヒゲナガダコ

膜でつながったうでには、きゅうばんの列にそって長いひげのような突起(触毛)が生えています。この触毛でえものの動きを感じ取っていると考えられています。

●タコ目ヒゲナガダコ科●1m(全長)●世界中●水深2500〜4200m

フウセンウナギ

鳥のペリカンのように大きな口が特徴です。魚類や甲かく類、イカなどを食べます。胃が大きくふくらむので、大きなえものも丸のみにできます。

●ウナギ目フウセンウナギ科●1.6m(全長)●大西洋北部●水深2000〜3000m

フクロウナギ

おもに小さなプランクトンなどを食べます。のどを大きくふくらませることができ、大量の海水ごとえものを吸いこみます。

●ウナギ目フクロウナギ科●2m(全長)●世界中●水深500〜7800m

フタオサルパ

サルパのなかまは、このような形をしていてもヒトに近い生き物です。1匹が何匹にも分裂し、たくさんつながって群体をつくることもあります。フタオサルパは、丸い輪のような形の群体をつくります。

●サルパ目サルパ科●4cm(1匹の体長)●太平洋、大西洋●水深200〜700m

フタマタエボシナマコ

エボシナマコとはせなかの突起の形がことなり、先が二またに分かれています。海底にくらし、小さな栄養分のつぶを、どろごと食べます。

●板足目エボシナマコ科●20cm(体長)●インド洋西部●水深4800〜5200m

フリーフォール式ランダー「江戸っ子1号」

金属のわくに、水温計など環境を調べる装置や、カメラなどを組みこんだ機械です。動きまわることはできませんが、超深海にももぐれます。自分の重さで海底までしずんで、調査を終えたらおもりを外して水面までうかび上がります。

ベニズワイガニ

ズワイガニとよく似ていますが、からだの色がまっ赤です。ズワイガニよりも水深が深い場所を好みます。

●十脚目ケセンガニ科●13cm(甲らの長さ)●日本近海(北海道〜相模湾の太平洋側、日本海)、太平洋北西部●水深500〜2700m

ボウズウニ

深い海のどろにおおわれた海底にくらします。からだの横から生えた太いとげが特徴ですが、このとげの役割はよくわかっていません。

●オウサマウニ目オウサマウニ科●4cm(からの直径)●日本近海●水深90〜700m

ホウライエソ

大きな口で、自分のからだほどもある大きなえものをのみこみます。口を大きく開くことができるように、頭とせなかをつなぐ関節が特殊なしくみになっています。背びれの先の発光器で、えものをおびきよせると考えられています。

●ワニトカゲギス目ホウライエソ科●35cm(全長)●世界中●表層〜水深4700m

ホタルイカ

発光器から青白い光を放つイカです。この光を使って、敵から身をかくしたり、なかまどうしでコミュニケーションをしたりします。昼間は深海にひそみ、夜にえものを追って海面近くに上がってきます。

●ツツイカ目ホタルイカモドキ科●7cm(胴の長さ)●日本近海●水深0〜1000m

マウナ・ケア

世界一高い山といえば、標高約8848mのエベレストが有名です。しかし、この「標高」とは、海面の高さから山頂までを測った高さです。いっぽう、ふもとから山頂までの高さだと、ハワイ島のマウナ・ケアがエベレストをぬいて世界一です。これは、ハワイ島は島そのものが巨大な海底火山で、ふもとが水深5000〜6000mの深海底にあるためです。

マウナ・ロア火山

マントルのおく深くから、高温のマグマがまっすぐわき上がってくる場所を「ホットスポット」といいます。ホットスポットは、数億年のあいだ同じ場所で活動を続け、ホットスポット上の海底では活発な火山活動が見られます。太平洋上のハワイ諸島は、代表的なホットスポット型火山によってつくられた島じまです。

マリアナイトエラゴカイ

熱水噴出孔のまわりにくらし、からだの表面についている微生物を食べてくらします。100℃以上の高温の熱水にも、短いあいだならたえることができます。

マンガンノジュール

鉄とマンガンを中心に、ニッケルやコバルトなどさまざまな金属をふくむ岩石です。マンガンノジュールは小さくて丸い岩石で、深海平原にたくさん見られます。マンガンクラストは大きなかたまりで、海山の斜面や頂上などの岩をおおっています。マンガンクラストのほうが、白金(プラチナ)やコバルトなど貴重な金属を多くふくみます。

ミズウオ

表層から深海まで泳ぎまわり、魚やイカなどをつかまえて食べます。見つけたえものはなんでも丸のみにするので、水中をただようプラスチックごみなどをえものとまちがえて食べることもあります。

●ヒメ目ミズウオ科●1.3m(全長)●世界中●水深0〜1830m

ミツクリザメ

海底の小動物が発する弱い電気を長い鼻先で感じ取り、えものをさがします。泳ぎはとてもゆっくりしていますが、えものを見つけると、大きく前にのびるあごをすばやくはじき出してつかまえます。

●ネズミザメ目ミツクリザメ科●2m(全長)●日本近海(南日本の太平洋側、富山湾)、太平洋、大西洋、インド洋●水深0〜1000m(おもに270〜960m)

ミヤビトゲヒラタエビ

世界で1個体しか見つかっていない非常にめずらしいエビです。トゲヒラタエビ科のエビは、腹部が曲がらないようにする特別なしくみをもっています。これは、敵にかんたんにのみこまれないようにするためだと考えられています。

●十脚目トゲヒラタエビ科●7cm(体長)●インド洋西部●水深1161〜1185m

ムーランルージュ

赤い花のように見えますが、ウニと同じ、棘皮動物のなかまです。くきの根もとを岩石にくっつけて立ち上がり、うでを広げて、流されてくる小さな栄養分のつぶなどをとらえて食べます。

●ゴカクウミユリ目ムーランルージュ科●60cm(くきの長さ。うでの長さは15cm)●太平洋西部●水深1000〜1900m

メルルーサ属の一種

おもに水深400mより浅い海底にくらします。夜になると活発に動き出して、イカや魚などを食べます。メルルーサ科の魚は食用魚として人気があり、日本にも多く輸出され、白身魚のフライなどの材料にされています。

●タラ目メルルーサ科●45cm(全長)●大西洋東部、地中海●水深30〜1075m(おもに70〜400m)

モントレーキャニオン

北アメリカ大陸西岸のモントレー湾には、「モントレーキャニオン」とよばれる、世界最大級の海底谷があります。谷の中のふくざつな地形は、イソギンチャクやクラゲ、ナマコや魚など、さまざまな生物達のよいすみかになります。

ヤマトトックリウミグモ

見た目はクモによく似ていますが、別のなかまです。とがった口の先をイソギンチャクなどにつき刺し、体液を吸います。

●皆脚目トックリウミグモ科●2cm(体長。あしを広げたはば12cm)●日本近海(北海道〜九州の太平洋側)、太平洋北部●水深300〜1700m

ユウレイイカ

からだ全体がすきとおっていて、長い2本のうでには約40この発光器があります。潜水調査船の調査によって、かつて想像されていたよりも活発に泳いでいることがわかっています。

●ツツイカ目ユウレイイカ科●25cm(胴の長さ)●太平洋西部〜インド洋●水深200〜600m

ユウレイオニアンコウ

おにの角のような頭のとげと、ゆうれいのように透明なからだが特徴の、チョウチンアンコウのなかまです。オスが繁殖のためにメスにくっつき、そのままメスのからだの一部になってしまいます。

●アンコウ目オニアンコウ科●20cm(メスの全長。オスは全長2cm)●太平洋、インド洋、大西洋●水深1500〜3200m

ユメナマコ

ナマコのなかまではめずらしく泳ぎが得意で、水かきのような膜でつながったいぼあしを使って泳ぎます。どろの中の小さな栄養分のつぶを、どろごと食べています。食べ物が多い場所に移動するために、泳ぐようになったと考えられています。

●板足目クラゲナマコ科●20cm(体長)●世界中の温帯〜熱帯●水深300〜6000m

リュウグウノツカイ

世界最大の硬骨魚類ですが、おもな食べ物は小さなオキアミなどのプランクトンです。頭を上に向けて泳ぎ、大きくつき出すことのできる口をのばして、えものを吸いこみます。

●アカマンボウ目リュウグウノツカイ科●最大8m(全長)●世界中の熱帯〜温帯●水深20〜1000m

レアアース泥

「レアアース」とよばれる貴重な金属を大量にふくむ、ねん土のようなどろです。日本近海の小笠原諸島沖をふくむ、太平洋の海底で見つかっています。

NOT FOR SALE ©KADOKAWA
写真提供:PPS通信社、アフロ、JAMSTEC、有限会社ブルーコーナー、アマナ、沖縄美ら海水族館、魚津水族館、マリンピア日本海、千葉工業大学惑星探査研究センター 松本亜沙子(チヒロクサウオ)、海遊館、NOAA、T-style(ダイビングショップ)、伊豆大島ダイビングセンター、磯崎威志(マンガンノジュール、レアアース泥)
Lophelia pertusa NOAA by NOAA Ocean Explorer, https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Lophelia_pertusa_NOAA.jpg CC BY-SA 2.0(チョウジガイ科の一種)
Lamellibrachia luymesi1 by Charles Fisher https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Lamellibrachia_luymesi1.png CC BY 2.5(サツマハオリムシ属の一種)
Kiwa tyleri (10.1371-journal.pone.0127621) Figure 4 by Thatje S, Marsh L, Roterman CN, Mavrogordato MN, Linse K (2015) Adaptations to Hydrothermal Vent Life in Kiwa tyleri, a New Species of Yeti Crab from the East Scotia Ridge, Antarctica. PLoS ONE 10(6): e0127621. https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Kiwa_tyleri_(10.1371-journal.pone.0127621)_Figure_4.tiff?uselang=ja CC BY 4.0 / Adapted(キワ属の一種)
73476 alicella-gigantea-specimen by Alan Jamieson, Oceanlab, University of Aberdeen, UK https://commons.wikimedia.org/wiki/File:73476_alicella-gigantea-specimen.jpg CC BY-SA 4.0 / Adapted(ダイダラボッチ)
Paguropsis confusa (10.3897-zookeys.752.23712) Figure 28 (cropped) by DST/NRF ACEP - Spatial Solutions project team https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Paguropsis_confusa_(10.3897-zookeys.752.23712)_Figure_28_(cropped).jpg CC BY 4.0(キンチャクヤドカリ)
イラスト:小副川智也、小堀文彦